

自由こそ最高と歌いつづけたロック歌手

2023年2月25日、第32回国賠ネットワーク全国交流集会で、ひとつ大朗報が報告された。6年前に、北海道月形刑務所で獄死したロック歌手伊藤耕の遺族による国家賠償請求が、満額4300万円で職権和解したという。

ええ、すごいな。伊藤耕ってどんなロックンローラーだった？ 月形刑務所の獄死事件の詳細はどんなのか？ さっそく3月4日、映画「THE FOOLS 愚か者たちの歌」を観、上映館で販売していた本（志田歩著「THE FOOLS MR. ロックンロール・フリーダム」東京キララ社、22年12月刊）も読んだ。

高橋慎一監督による2時間の映画は、グループのパワーに圧倒され、耕の歌でからだ熱くなった。志田の著書はまったく知らない分野を、仔細に記録してるので読むのに大変だったけれども、ひとつのグループをずーと追跡してるのは、とても貴重な記録だと実感した（仲間4名の病死を含む）。

大麻を愛好する伊藤耕は月形刑務所で6度目の受刑生活をしていた。満期出所を2017年11月26日に控える42日前、10月15日昼食後体調を崩す。月形町立病院で胃けいれんと診断。しかし翌16日になっても症状は悪化するばかりで、伊藤耕は繰返し床に倒れこむ。ついに夜11時遅く、ふたたび月形町立病院へ救急搬送、日付が17日に替わった午前0時1分、息をひきとった。

満寿子夫人は「死体検案書」の死因（記載4項目にすべて推定の付記あり）に納得できなかった。疑問はすぐ真相究明のアクションになった。耕の遺体を解剖するため火葬をするのを1か月延期した。

しかし「法医学の壁」は巨大だった。警察の捜査結果に異議申立することに協力してくれる法医学者は、絶無に近いのだ。なぜなら、大学医学部法医学教室の先生は普段、大学の授業をこなす一方、警察から司法解剖や行政解剖の業務委託を受けている立場だからだ。

雲を掴むような試行錯誤が積み重ねられた。明日は火葬だという前日11月10日、必死に電話をかけていた満寿子夫人は、1本の間違い電話をかけた。相手は新潟市内の病院だった。と、事情を傾聴した職員は驚くべき言葉を口にした。〈監察医制度の現状に疑問を感じ、死因究明のネットワーク作りに尽力している医師が、最近まで当院に勤務していた〉（志田前掲書、361ページ）。

かくして道は打開された。仲間たちは耕の遺体を11月14日ふたたび札幌に搬送。15日、「北海道大学死因究明教育研究センター」で自主解剖された。死亡原因は腸閉塞の一種「絞扼性イレウス」だった。聴診やレントゲンでも異状はわかるし、CT検査をすれば確実にわかる病状だった。

まちがい電話から奇跡はうまれた。伝説のロックミュージシャンと遺族とその仲間は、最後に神の恩寵を受けたのだった。



ありし日の伊藤耕（映画チラシより部分）